

「火」

(ルカによる福音書 12:49-56)

「平和のため」と言われているときほど、疑わなければなりません。「平和のため」という号令は大概、自国のため、自分の民族のため、自分の家族のため、という枕詞が付くものです。そこには、「平和のためだから仕方がない」と、無視され、抑圧される命があります。また、「仲良きことは美しきかな」にも危険な側面があります。組織とか集団コミュニティの論理が個人の意思よりも優先され、同調圧力が強まり、個人が見えなくされます。和を乱すものは悪とされ、少しの逸脱も許されない。それができないと排除される。そのなかで人は、排除の対象にならないように、自分を小さくして生きるようになります。しかしそのような社会は、神から離れた社会です。互いに愛し合い、命を尊重し合うよりも、別の力や意思が優先されてしまっているからです。何よりも、神が「良し」としてくださった命の輝きが消されているからです。

「火」を投ずるためにきたと言われる主イエスは、「その火がすでに燃えていたらと、どんなに願っていることか。」と言われます。主イエスのもたらす「火」は、裁きの火ではなく、信仰の火です。人々に信仰の火が燃えていたなら、十字架は不要でした。神から離れた世界に投げられた「火」は、本来の人間の姿を回復します。信仰の火をいただくなら、その命は神からの祝福に満たされ、「良し」とされた命が回復されるからです。しかしそうになると、これまでの神から離れた社会の有り様や関係性は変えられることになり、分裂が起こります。主イエスは確かに、平和をもたらすために来られました。しかし、まことの平和から程遠いこの世界では、主イエスのもたらす「火」は、分裂をもたらすのです。

主イエスがきたから分裂が生じるのではありません。裂け目はもともと、神と人、そして人と人との間にあったのです。主イエスがもたらした「火」によって、この裂け目が照らされたのです。「信仰の火」を拒む人間は、この裂け目を目の当たりにしても、「自分は正しく、排除されるべきは他者である」という思いから抜け出すことができません。その人間が主イエスを十字架という「洗礼」へと追いやるのです。

主イエスは十字架によって、この裂け目を身に負い、神と人、人と人との間を結ばれます。そのために十字架に登られた方の姿を見つめるとき、わたしたちの裂け目は、神の愛を表す回復のしるしへと変えられます。主イエスのもたらした「火」によって、わたしたちの裂け目が明らかにされ、その裂け目を結ぶ十字架という架け橋を知り、真の平和の源がどこにあるかを知ります。